

西ドイツの家庭生活と子供たち

——ミュンヘンとオスナブリュックでの体験を中心に——

田 中 博

はじめに

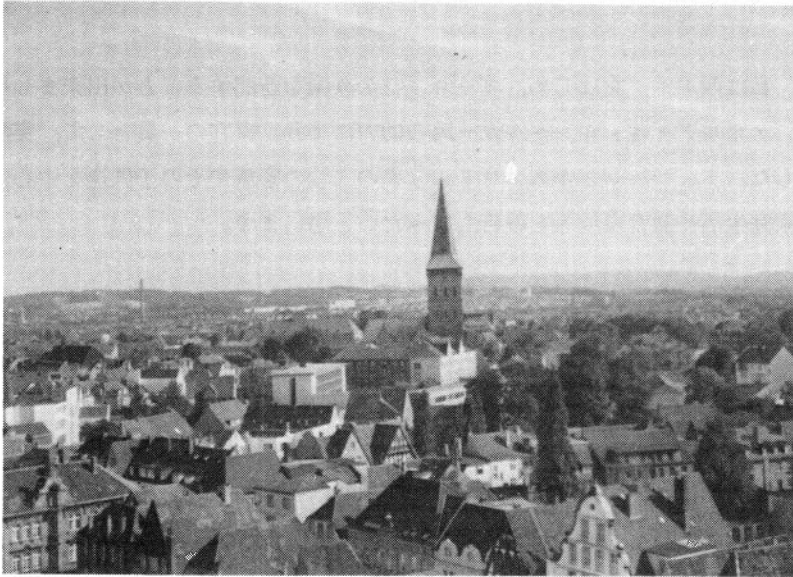
機会あって、私は西ドイツをはじめ、ヨーロッパ7カ国を訪問することが出来ました。特に、西ドイツでは、ゲオルグ・ニュルンベルガー氏の助力により、家庭の一員として、実際の家庭生活を体験しました。ミュンヘンとオスナブリュックの二つの家族やその子供達を中心にし、それ等を取りまく家庭生活や教育環境等を報告してみたいと思います。

(1) 二つの家族の周辺

西ドイツは地方分権の強い国である。例えば、戦後同じ、敗戦国の日本が教育制度を、アメリカのある州の6・3制を取り入れ、文部省によって強い統制を受けているのに対して、西ドイツは、戦前の教育制度を、ほぼそのまま引きついでおり、それはフォーク形教育制度と呼ばれ、複雑である(1)。また連邦政府に文部省は存在せず、文部大臣もない。学校教育の管轄権は、憲法によって各州にあり、州によって教育の独自性を保持しようとしている。それに加えて、ドイツそのものの歴史的形成の過程からも、明確なように、地方の独自性は、私達、フレムデにとっても、幾つかの特色をひろいあげることが出来る程である。第一の家族は、北ドイツ・ニーダー・ザクセン州オスナブリュック (Niedersachsen, Osnabrück) 〈ヴェストファーレンの講和の折衝が行なわれた都市〉に住む、未亡人の家族であり、第二の家族は、南ドイツ・バイエルン州ミュンヘン (Bayern, München) 〈芸術とビールの都〉〈保守的で愛国的なカトリックの都〉このミュンヘンの新市街のはずれのピピングプラツに住む、カトリック音楽の作曲家の家族であった。二つの家族の住む地域はまさに北と南とに別れ、地方の特色が一層明確なところで、比較をすることが、容易で、西ドイツという大きな概念を包括的にとらえることが出来るのではないかと思う。言語的には、前者は、ニーダードイチェで、後者はオーバードイチェである。ニーダードイチェの方が標準語的で、私達には、理解しやすい。おおまかな比較が許されるならば、北ドイツの人々は、几帳面でとりすましており、知的であるのに対して、南ドイツは、豪放磊落で、情的であると言えよう。

(2) オスナブリュックの家族

オスナブリュックという町の名を知る人は、多くあるまいと思う。北ドイツのハンザ都市として有名なブレーメン(Bremen)から南西に約80キロ程下ったところにある。現在では15万人の人口を持つ地方都市<Zwischen Teutoburger Wald und Wiehengebirge liegt Osnabrück, die schöne, alte Hansestadt, Kultur- und Wirtschaftsmittelpunkt eines weiten und fruchtbaren Landes.>(2)で、有名なトイトブルガーの森の北はずれにあり、これから北は、もうバルトと呼ばれる森はなく、地続きのデンマークまで、北ドイツ特有の低地が、どこまでもはてることなく続くのみである。



Marien Kirche の塔上から見た Osnabrück の中心地

ヨーロッパ横断列車(T.E.E.)の停車する Osnabrück Hauptbahnhof から徒歩で約5分の所に、フラウ・バハグ(Frau Bachg)の家がある。この町の出身である、ニュルンベルガー氏の紹介で、彼女の家で、一ヶ月程、同居させてもらい、ホテルや、学校等では、理解しがたい、彼等の内部からのドイツとは何かを、知る貴重な体験をもった。

フラウ・バハグは第二次世界大戦後しばらくして、戦争の為に負傷した夫を失い、テクラ(18才)、ギゼラ(16才)ミカエル(12才)とおじいさんの5人家族であった。年金をたよりにする、中流以下の生活であるが、私共の生活よりは安定していた。ドイツに着いて、一週間程してから、この家族の中に飛び込んだのだから、最初は大変だったし、それに、私共、日本で生活では感じない、強烈な異和感をいやがうえにも受けた。フラウ・バハグ一家の夏のある一日を取り上げて、ドイツの生活の一端を知っていただきたい。ニュルンベルガー氏の紹介で、一家の一員にということで、三階の子供達の大きな部屋を一つ空けて、私に提供してもらった。中央に勉強机があって、一角に、羽布団のベットがそなわっている簡単だが、ゆったりとした部屋であった。ドイツの家々の窓は、本当に美しい、レースカーテン等で、かざられている。この部屋からの街



Familie Frau Bachg:(筆者),Thekla, Frau Bachg, Giesela

のながめはずばらしく、早朝から明るい陽光が射し込み、教会の鐘や、ハトの鳴き声で、私は、ねむりからさめた。何と静かで、平安な静じゃくに、街全体が、あるのだろうか。階下ではすでにムッターや子供達は起き、朝の準備にいそがしい。末子のミカエルは、大抵、ブロートヒエン(Brotchen)を買いにやらされるが、時々、またかという顔をして、追いたてられたりしていたのが愉快だった。ムッターは、朝食の準備、ドイツの朝食(Frühstück)は簡単で、コーヒー豆をひくことぐらいが手間のかかるもので、あとは、バター、ハム、チーズを出し、自家製のマーマレードを出せば、終りである。朝食が終ると三人の子供達は、学校に出かけてしまいます。8時には学校がはじまります。その後は、フラウ・バッハグの活躍の時間で、そうじ、洗濯、ベッドメイク等の仕事に取りかかり、11時頃には、それ等をすましてしまわなければなりません。ドイツの昼食(Mittagessen)は、1日のうちの唯一の暖い食事なので、準備にも一番時間が必要です。午後一時すぎには、学校から帰宅し、ミカエル等は、昼食の出来るのを、今やおそしと待っているのです。小中高は、西ドイツでは、午前中で、午後は休みで週5日制が原則です。午後授業のあるところは、全国でも例外的である。近年小学生の午後の授業(働く女性のことも考えて)を検討されはじめているが、大巾に変化があったとは聞いていない。午後のミカエル少年達の生活では、今の日本の子供達から奪い取られた自由な友達との時間がたっぷりあります。時々、私が英語教師であるとのふれ込みがあったので、Homeworkの英語を手伝わされましたが、たいした量ではなく、30分程もやれば出来るもので、Homeworkに追われて、遊べないという状態はみられませんでした。町には、いくつかのスポーツクラブがあって、ミカエルは柔道クラブに週二回通っています。クラブのない日は、近所の友達とプールに出かけたり、裏庭でピンポンをしたり、裏庭のウサギの世話をしたり、伸び伸びと遊びを中心とした生活をしていました。ギゼ

ラやテクラは週末、社会奉仕と、アルバイトを兼ねて、病院の手伝いに出掛けていた様子です。このようにドイツでは、組織からしばられない自由時間が、社会的に認められ、そのことが、個人々の、自主的な子供達の生活を形成させていることは、大きな目で見ると、独立独歩の人間を作り出す原動力になっているのではないだろうか。ただ共働きや、母子家庭の子供達は、大変困った問題を引き起す可能性があり、昼食をも子供達自身が作らなければならぬという面をもっており、社会的にも注目されはじめています。その為西ドイツではHort「学童保育所」〈6才~15才、昼間、両親や家庭に於て、子供の安全が保障されないものを対称につくられた施設で、主として、Kindergartenと併置されている場合が多い。大都市を中心としていて、まだ数が多くない。〉(3)が出来つつあるが充分でなく、ミカエルの友達で、やはり母子家庭のフランクは、この家で、ほとんど午後をすごしている。午後3時頃に、ティー(Tee)の時間があるのが普通で、ケーキ等を出して、くつろいだ時をすごすわけです。2階に住んでいる、おば等、その日居合わせる人々が、居間に集って、世間ばなし等を楽しんでいるようです。T.V.は昼間は、ほとんど放映していませんから、T.V.とにらめっこをしている主婦は見付けようにも、みつかりません。人と人との接触を大切に、主婦は常にその話題の主演をつとめるのが、役割りです。日常生活をしばらく観察していると、そこかしこに、手造りの生活があり、その為生活自身に、生気が感じられます。情報におし流され、次から次へと押し寄せる既製文化にどっぷりとめり込んでしまった日本の主婦達には、無くなりかけている、家事に対する自信のあふれる、ムッター達である。西ドイツでは、夏には、一斉に果物が出まわって、Marktplatzには楽しい市が立ち、それらから買入れた果物を、二日ばかりで、リンゴジャムを作ったり、プラムやチェリーのびんづめをしたりして、自家製の食糧をたっぷり作りあげたり、しているのを見ると、私達が、季節感を忘れ、安易に流れる日常生活におぼれこんでいるのを、痛切に感じないわけにはいきません。明るい窓べで、夕食(Abendessen)をすませると、又楽しい自由な時間があります。暗い冬の反対で、夏は、9時になっても、西の空にあかあかとした陽光が残っていて、室内でも、電気をつけずともすごすことが出来ます。陰うつな冬の中から開放されて、この地上に生命が、あふれ出ている北国の夏は、人々の喜びの時であるわけです。家族のだんらんや、家族を含めたパーティーや、裏庭でのバーベキューパーティーをしたり、人々の交流の中にも、喜々とした感情がうかがわれます。ミカエルのおじいさん(70才をはるかに越えているが)は木曜日の夜になると、教会の合唱団の一員として、クラブに出かけて行きます。自分達で、人生を楽しむ計画を立て、実行していかなければ、誰れも手伝うことはない。むしろ、他人の引いた、レールを走ることなんて、はずかしいことであるという意識が強い。フラウ・バッハグ一家の一日を簡単に描いてみたが、彼等の生活の中で、一番強く印象に残り考えさせられることは、子供達は、半日学校に支配されるだけで、後は自由であり、労働者も週休2日制(土、日は全くといってよい程、お店も休み)、夏のUrlaub(休暇)は、3、4週間も取ることが出来、その間、会社から全く解放される。その空白の時間を、いかにうめ、どうすごすかが、その人間の価値をきめていくことになる。学校や会社等の組

織に追いまくられて、自分の生活を失い、ビジネスをしりぞいた時は、せみのぬけがら同然という人生は、けいべつを受けこそすれ、尊敬もされない。フラウ・バツハグやその一家を支えている、西ドイツの社会保障について、少しふれて置きたい。〈In der Bundesrepublik erhalten Familien, deren Einkommen nicht mehr als 1,100 DM im Monat beträgt, zur Zeit für das zweite Kind 25 DM, für das dritte und vierte Kind je 60 DM, für das fünfte und jedes weitere Kind je 70 DM im Monat.〉(4)月1,100 マルク以外の収入家庭の第二子以下の子供達に国家の援助が上記のように実行されている。〈1 DM ≒ 105円〉又、年金制度は次のようになっている。〈In der Bundesrepublik sind alle Arbeitnehmer pflichtversichert. Männer erhalten ab 65, Frauen ab 60 eine Altersrente. Das Rentenalter soll jedoch in Zukunft flexibel werden. Der Arbeitnehmer kann dann sein Rentenalter selbst bestimmen. Die Altersrente macht etwa 60~75% des früheren Erwerbseinkommens aus. Die Altersrenten sind dynamisch, d. h. sie steigen jedes Jahr entsprechend dem Einkommenszuwachs der Erwerbstätigen.〉(5)男子は65才、女子は60才以上は働いていた時の60%~75%の収入が、年金として支払われています。

(3) ミュンヘンの家族

ミュンヘン市のはずれ、ピピングプラッツにある、カトリック教会音楽の作曲家である、ツェトヴァウァ氏の家族は、中流より少し上の部類に入るのだろう。独立住居(地下を入れると3階建)で、かなり広い芝生の庭とプールのある、近代的な住いである。家族構成は、夫妻と6人の兄弟、通いのパートタイマーの女中で、大変にぎやかである。カトリックは、子供は神の恩寵によって生かされているのだからということで、制限をきらう。この家族はその証しであるのだろう。しかし西ドイツ全体では、子供の数は変化しており、やはり2・3人が多い。〈Wie in anderen hochindustrialisierten Ländern so hat sich auch in Deutschland die Familie in den letzten Jahrzehnten grundlegend geändert. . . Die meisten Familien haben nur zwei oder drei Kinder.〉(6)この6人の子供達が、はじめて、私をむかえてくれたのが、芝生の青々とした庭で、バトミントンに興じていて、ショートパンツの元気な姿であった。一人一人、右手を出して、歓迎してくれた。たくましい、ドイツの子供達だった。一ブロック南へ行くと、森があり、ミュンヘンという大都会に住いながら、子供達は、何と多くの自然の中で育つことが出来るのであろう。ドイツは中小都市に至るも、すばらしい緑地をもっている。これは、国民が、大切に育ててきた結果である。ドイツ人の親は、子供達が自然に親しんで、頑健な肉体を作り、堅固たる精神を育てることを強くのぞんでいる様子である。オスナブリュックのミカエルも、私は、幾つかの名所に案内してくれたが、ほとんど徒歩で、郊外の動物園等にも、疲れる私を、引きずっていくようなたくましい小学生だった。ツェトヴァウァ氏も又、子供達にこのことを強く望んでいる様子であった。社会の猥雑さから子供達を守るために新聞 (Zeitung) さえ自宅には持ち込

まない。彼の Büro でそれを読むと、不思議に思ったずねた私に答えたものだった。プールを持ち、ペンツの持ち主であるこの家族が、T.V.受信機の一台中も所有していないのは、彼の方針であるらしい。全ての家族が、このようでは、ないが、カトリック信者の保守層の一方の典型の一つであることにはかわりがない。子供達の上の方は、地下に、個室を持ち、下の子供達は、2階の夫妻の部屋の周囲にやはり個室を与えられている。ドイツでは徹底したプライバシーの尊重が、ここに表われている。大学生ぐらいになると、親の家を出て、同じ街でも、下宿をするのがむしろ当然のように思われている。親と子の人生はスタートから別のものであるという認識が、はっきりしている。だから教育ママのように、人生の大半を、子供に全生活をそそぎ込み、もぬけのからになった老後になって、それに対する反対給付がないとあって、グチをこぼしながら一生を送る愚を繰り返すこともない。つらいけれども、最初から親と子の人生は別だという人間の本性にねざしているものを認めてしまうことこそ必要であろう。またそれだけ人生とは厳しいものであろう。ある日、ヨーロッパの他の国に旅立つために、繁華街、カウフィンゲル通り (Kaufinger Straße) まで、カバンを買に行って戻った時、テラスで、ハンス達が、エヴァンゲリッシュの伝道師と、信仰についての問答を、〈Ich glaube, . . . 〉とやっているのに出くわしたが、自分の信ずる宗教を、まだ小学生や中学生が、伝道師を相手に議論することにも驚いたし、〈私はこう思う〉という自己主張が出来るように育てられていることにも大変なショックを受けた。何故か？日本の子供や社会が、論理的な自己主張を嫌う社会であり、自己主張できない大人や子供達が社会が構成されているからである。他人志向型の典型的な社会が日本だからである。ツェートヴァウァ氏も、ビュローから、昼食の為に家にもどってくる。彼はバイエルン地方の人々特有の陽気さで、ドイツ人にはめずらしく台所で手伝ったりしている。昼食が、2時間もかけられているのは何か。1つには、風土から来ている健康上の問題、すなわち、たつぷりと熱い肉料理や豊かな野菜は、ヨーロッパという北緯50℃以北にあるドイツでは、太陽の恩恵が少なく、そのことによる絶大な体力を要求される。それに答えるために必要不可欠なのだという理由。家族の対話が、精神的にしっかりと結び付けることにも役立っている。2才の子供からして、しっかりとしたテーブルマナーを身につけ、お客様の前でも、実行できるように、夫妻はたえず気を配り、上の子供たちも、下の子供たちを、そのようにしつけていく手伝いをしている。大変、めんどろなことを、繰り返し、しつけ、家庭生活の社会である居間と食堂では、一人の人間としてのマナーを要求しつづける家庭、日本の、ゴロゴロねそべて、親子が、ジャレ合うのが、親子の情愛であるかの如くの光景は、家庭こそ社会の一步だという考えを失っている。2度3度同じ注意を受けて、直さないと、夫妻のするどい叱責に会う。楽しい食事が出来るのは、一人一人がマナーを守るからだ、社会のルールを守ることが、楽しい市民生活を形成する第一歩だという、徹底した子供たちへのしつけは、あらゆる機会をとらえて繰り返される。午後は小さな子供は午睡、大きな子供たちは、わずかな Homework をすませて、プールに入ったり、バトミントンをしたり、クラブに出かけたたりする、この家族の子供も、一人、柔道クラブに通っていて、私を、日本人だからといって、ク

ラブに引張って行きそうな気配で、ことわるのに大変苦勞をした。買物に午後、ムッターが時々出掛けたが、子供はめったに同伴されなかった。子供の世界と大人の世界はきっぱりと区別されていて、夜の劇場やパーティ等、子供の出入は禁じられているのも同然であった。子供達の夜は早く、8時を過ぎると自分の部屋に帰される。時々、私が、夫妻や、年上の兄弟と日本の話などをしていて、下の子供たちは、寝室に入るのをいやがったりしたが、二言三言、説得されると、おやすみのキスをして、階段を登って行く。

(4) 西ドイツに於ける幼児教育施設について

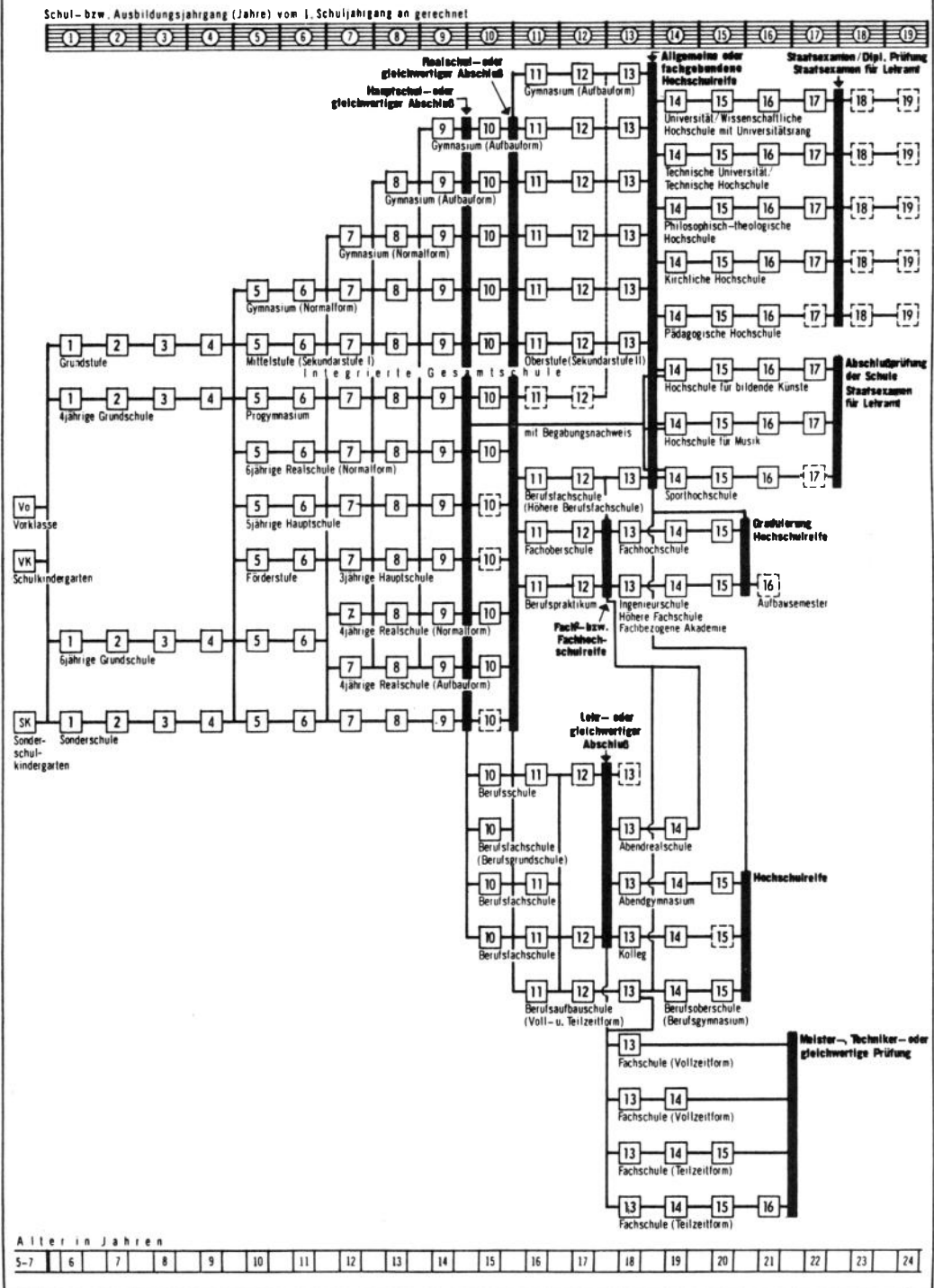
一言にいて、西ドイツの幼児教育施設は、多様化し、女子労働者の要求に十分に答えているとは云い難い。オスナブリュックのフランク君の場合のように、本当に Hort (学童保育所) が必要であるにもかかわらず、知人に見てもらわねばならない現状を考えても、幼稚園 (Kindergarten) を含め、幼児教育施設は、正規の学校系統からは、はずされており、社会福祉の中に含まれている。西ドイツでは、乳幼児施設は、0才から1才半までの乳児保育所 (Liegen-Krippe) と1才半から3才までを保育する幼児保育所 (Lauf-Krippe) があり、3才~6才まで Kindergarten が在る。西ドイツでは、学校系統では、国公立が絶対的であるのに対して、Kindergarten 公立は全体の半ほどで、あとは教会を中心とする私立でしめられている。西ドイツの幼稚園は日本の幼稚園と保育所を兼用している部分があり、長時間保育をすところもあるが、女子労働者の子弟を全部収容していくには、十分ではない。

お わ り に

私が二つの家族を中心にふり返って見る時、強く印象に残ることが2つある。1つは親子の関係である。日本でも、戦後、子供達の自主性の育成を強く望んできたのだけれど、現状では願望する程、自主性というものが、早急に定着するはずのものでもないが、それにしても、むしろ、その反対面の方が、目についてきている。西ドイツに於ては、親子の間には、最初から、お互いは別の人生を構成しているものだという認識がある。住宅も、同じ敗戦国と思えないほど復興し (国も、貯金のボーナスや、税制、長期低利貸付等で助けている。) て、社会福祉的集団住宅でさえ、4DKが最低であるように、堅固な個室を確保している。子供もプライバシーを保つことが出来る。子供である間の、家庭教育は、徹底した社会ルールと生活のルールのしつけである。内容についての自由は守られ、意見の衝突があっても、見守っている。実際、人間の本性を認識すれば、それは、親子でも立入ることが出来ぬ領域であることは明白である。子供の教育についても、成績そのものや、学歴にそんなにこだわらない。東大や京大以外は、皆だめな大学で、その路線からはずれたらだめな人間なのだという思考は、思いもつかぬことらしい。才能等は自分自身が見つけ、のばして行くものだと、ゆう然とかまえている。人間の価値を測るものという安易

Tafel 1

AUFBAU UND GLIEDERUNG DES SCHUL- UND HOCHSCHULWESENS IN DER BUNDESREPUBLIK DEUTSCHLAND



Quelle: F. J. Weir, Eigene Zusammenstellung nach Unterlagen des Statistischen Bundesamtes.